

月刊『カーサ ブルータス』
*Life Design Magazine

「えっ、知らないの？ 見てないの？」を世界中から集めました。

Casa

BRUTUS®

1

見たい、行きたい、欲しい！ 2009年の話題がこの一冊に。

建築・デザインの ベストヒット100

2010 vol.118
JANUARY
定価 880円



クオン・サンウも登場！
銅天国♥ほかほかの韓国、ソウルへ。

ジル・サンダー氏特別編集。
ユニクロ「+J」デザインの源。

アリス・ウォーターズの食べられる校庭。



Lamp

輪島塗の美しさをまるでルーペで拡大し、鮮明に見せるように、漆塗りの美しさにスポットを当てたLED（発光ダイオード）照明。



Double lunch tray set

磁石で真のように閉じた同形の2枚のトレイ。収納時には箱として、開けば、2枚の皿=食器として使用可。沈金のポイント模様付き。

100

日本の伝統工芸 × ブルレック兄弟

photo_Paul Tahon and R & E Bouroullec (products), Tetsuya Ito
text_Chiyo Sagae editor_Akio Mitomi

世 界中のプレスから
問い合わせが殺到
している」。普
段は冷静なロナン・ブルレックが興奮気味だった。2月下旬にロナンが輪島を訪れて以来、デザインの繊細なニュアンスを理解し、完璧な手作業を施してくれた輪島の職人たちへの信頼と感謝は常に揺るぎなかった。

多くの秀逸な日本の伝統工芸が抱える現状と同じく、輪島も、人の手と時間をかけて生む伝統の漆塗り技術をどう現代に生かし、世界に発信するのか、その未来を探っていた。こうした日本の伝統工芸の現状に新たな可能性を見出すべく、日本の工芸技術を海外へ発信する国の事業へJAPANブランドの支援を得て、今が旬のデザイナーを起用した国際プロジェクトが生

また。日本の工芸に高い関心を寄せていたブルレック兄弟（09年もベジタル（p.70）や（クラウド）が話題を呼び、フランスのみならず世界を代表するトップデザイナー——彼らの同意を得て「Weima x Bouroullec」が年次に発動。6月、ついにプロトタイプの世界発表を迎えたのだ。

パリー東京ー輪島間をつなぐ国際プロジェクト。「職人たちに会い、その現場を自分の目で見たい」。それが、ブルレック兄弟のたつての希望だった。海外のデザイナーにとつて、展覧会で日本の伝統技術に触れる機会はある。現場で生きる人々の現実や風土に触れる機会は稀少。要望は、まさに彼らの真摯な取り組みを物語っていた。輪島では、木の造形「木

輪島を訪れたロナン・ブルレックのひとこま。



あすなろの木が均等に、限りなく薄く削られた木片に見入り、感動。技術は自分の眼で確認する。



昔ながらの長屋建築を模して建てられた輪島工房。長屋の佇まいにご満悦のロナン。引き戸を開けて。



木の造形「木地」を作る橋本工房の職人たちの作業に目を輝かせ見学。知りたいことがたくさん！



橋本工房の2代目を囲み、プロジェクトチームの長山智美、大熊健郎と共に話聞き入るロナン。



Desk light

伝統的なお盆のようなフォルムを組み合わせることで「新たな形」を発見させる。デスクランプ。伝統の中の新たな可能性を示唆。



Pocket mirror

日常的に持ち歩き、温かみある美しい漆の触感を感じてもらおうと発想された、ポケットミラー。ユニセクスのデザインが現代的。

地」を専門に担う木地屋（桐本工房）へ。工房では、地元のおすなるや杉の木を原材料に造形のさまざまな工程が職人たちの手で施されていた。微妙なカーブやぼつりとした美しいポリウムが生み出される繊細な作業にロナンは目を見張る。伝統的な刺身盆や装飾小物など、古からの輪島作品にも新しい形の可能性を見つけたのか、質問と撮影に余念がない。飽やキリなど道具も用途と使い勝手に合わせて手作りされると聞けば、手に取って見聞。デザイナーにとって道具は、技術の裏づけとなる関心事だ。フランスの道具を職人たちに説明しようとしてクロッキー帳を取り出し、デッサンで説明を試みる。言葉の壁を越え、デザイナーと職人が和気藹々と通じ合う。そんな忘れ難い場面だった。昔ながらの長屋建築を模した（輪島工房長屋）では、「くりもの」（ろくろを回しながら形を切り出す）の「椀木地」、塗りの最初の工程「下地」や「上塗り」を見学し、さらに「蒔絵」（金銀、色粉と漆を使って重ね描く加飾技法）と「沈金」（のみで彫り、漆と金を入れる加飾技法）の工房を訪ね、それぞれの技術に精通する多くの職人から細やかな説明を受けた。

造形や加飾の美は言うまでもなく、薄布や土を施し、漆を巧みに使い分け幾度も塗り重ねる輪島塗の全工程を知ること、向かうべき仕事の真意をロナンに明らかにした。これだけ多くの職人の手を経て生み出される滋味深さを、いかに現代の、世界の消費者に伝えられるのか。土地に根ざし、脈々と受け継がれる技術（願わくば）ひと目で深く理解させ、さらに現代の暮らしの求める機能にどう落とし込むのか。それがデザインの前には、彼は静かに語った。

伝統とデザイン、未来をかけた挑戦の始まり。パリから待望のデザイナー画が届いたとき、誰もがブルック兄弟の導き出した答えの確かさに息をのんだ。塗りの味と深さを光によって周囲に広げるランプ2種。日常の使用を熟慮し、食器として、収納箱としても使用できるアシメントリー形の1対のトレイ。塗りの蓄積な手触りを知ってほしいと、ポケットミラー。数か月にわたる輪島での制作期間を経て、ゴージャスにしてシック、現代的な機能と輪島塗の技術が見事に融合した全4品（Valima x Bouroullec）シリーズの誕生となった。

「日本の伝統工芸の未来は、高い技術を簡略化する安価な量産にはない。その稀有な工芸技術を五感に感じさせる日常プロダクトを作ること、長く、大切に使うってもらうことにあるのでは……」。答えが明確な形を得た今、プロトタイプから世界発売への模索が、静かに進行中である。

Ronan & Erwan Bouroullec

ロナン&エルワン・ブルレック フランスを代表する兄弟デザイナー。機能と環境、稼働力を熟慮したシンプルで洗練されたデザインが好評。作品はポンピドゥーセンターやMoMAの永久保存にも選定され、カッペリーニ、ヴィトラ、マジスなどからプロダクトを発表。デンマークの繊維メーカー、クヴァドラ社との数年にわたる協働（クラウド）シリーズの09年の新作（写真左）は今号の表紙も飾る。小さなパーツを積み重ねることで空間的な巨大なオブジェや壁を自由自在に出現させる。http://www.bouroullec.com



©Studio Bouroullec



「フランスはね、こういう道具を使う…。口で言うより絵で描いた方が早い。職人たちも興味津々。